

閉会の挨拶

浅田 昭 (東京大学生産技術研究所 教授／研究交流部会部会長)

本日は、お忙しいなか、生研学術講演会に多数のご参加を賜りましてありがとうございました。

今回は、議題を「環境」というテーマを取り上げてみたわけですが、人類の歴史を紐解いてみますと、はるか昔から、つまり文明の発展とともに環境破壊が引き起こされた事例は数多くありました。科学・工業技術の進展が社会の利益・利便を大きく向上し、文明生活を育んできたわけですが、一方、火力エネルギー資源としての自然林の破壊、石炭、石油にエネルギー資源が変化すると公害の発生など環境社会に拍車がかかり、人間社会を苦しめてきました。

現在、62億もの人類社会が世界規模で急速に発展し、社会生活が向上することに伴い、何十億年かけて培われた自然を奪い、エネルギー資源が消費され、多種類の材料が複雑に組み合わさった工業製品が大量に生産されてきました。

その結果生み出される排出・廃棄物が都市のみならず、大気、海洋、森林、土壌をも地球規模で汚染するに至り、人類の未来を脅かすようになっていきます。

地球上の物資やエネルギー資源が有限であり、また採掘、採取、生産、利用、廃棄過程で予期せぬ環境問題を引き起こしてまいりました。われわれは循環型の資源利用に目を向け、リサイクルや無限の太陽エネルギーの直接利用を積極的に進めるようになってきました。

また、地球温暖化防止のため、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量を規制する京都議定書の批准という国際的な枠組みの中での課題があります。

さらに、汚染物質の産出や廃棄物を極力抑えた生産技術、

製品開発や生産工程の技術開発にも努力するようになってきました。

昨今のこのような趨勢を踏まえて、企業が環境に配慮し、製品のライフサイクルを考えながら生産を行なうことは、もはや常識となりつつあります。

また、省資源化、厳しい環境規制を設定し、クリアすることが製品の価値、ひいては企業のモラルの社会的評価を高め、企業の発展を支える時代でもあります。

当然、工学研究を行う立場からも行政機関、産業界と連携をとり、環境という視点に立って研究開発を推し進めることが重要な要素であり、また研究に環境への影響評価を取り組むことがこれからの研究者に求められる課題になるかとも思います。

今回は、環境問題の視点から、これからの工学研究を考えることを目的として学術講演会を開催いたしました。生研における様々な環境を念頭に置いた工学研究のなかで、環境評価やコンクリート資源等のリサイクル、製品のライフサイクルでおしはかる人類社会の持続可能性の研究、われわれの生活社会に密着した騒音、室内環境汚染、また自然環境が社会生活に害を及ぼす雷放電パルスなどの環境問題研究を取り上げてみました。

最後まで熱心に聴講、討論にご参加いただきまして、ありがとうございました。生研を代表しましてお礼申し上げます。

これにて本日の学術講演会を終了することといたします。どうもありがとうございました。(拍手)

(了)